

東大の先生とチンピラ 目次

| | |
|-----------------|----|
| 赤門 | 一 |
| グリーヒル・スクール | 一 |
| 尼寺 | 三 |
| 墨の海外講師 | 五 |
| 落書きの始まり | 七 |
| パリ旅行 | 九 |
| ミスターすしとスターバック | 十一 |
| 入国拒否 | 十三 |
| ダラス市のキー | 十五 |
| 中国揚州の大明寺 | 十七 |
| 看護連盟会長 | 十九 |
| 東大への提言 | 二十 |
| 文人画 | 二十 |
| 司法 | 二十 |
| 短歌 | 三十 |
| ピッツバーク | 三十 |
| 切望 | 三十 |
| 存在は幻想（アインシュタイン） | 三十 |

一 赤門

過って赤門の前を2・3度通った事があった。白山に友達がいて、時々近くを散策して歩いたからだ。

この外に東大とは縁のない、通りすがりのチンピラが私だ。

これが半世紀前の東大と私との、無関係な関係だ。

その頃の東大には憧れが有った。高い理想や理念が有り、何時も凜とした輝きに満ち満ちていた。

この東大が狂った。荒れた。縁などない私なのに悲しかった。辛くて息苦しかった。

学問の中枢を司る日本の礎が火を噴き、学士が兵になり、東大のキャンパスがおぞましい戦場に化した。しかし狂ったのは東大だけでは無かった、日本国中の大学が狂い、乱れ荒れまくった。

何のための闘争だったのか、私の様なチンピラには、未だこの意味や目的が分からない。だから紛争の結末も知らない。

ただ、学士様とも有るう者が、「何であるような愚かな事をしたのだろう」と、今でも疑問だ。

これがチンピラと東大との、無縁な関係だ。

二 グリーンヒル・スクール

ところがある時、アメリカダラス・グリーンヒルスクールに、「墨の文化」の海外講師として、40日間の授業を依頼され、渡米す

る事になった。

チンピラはアメリカの日常生活を体験したいと思い、ホームステイを希望した。グリーンヒル・スクールの先生宅2か所と、学校のPTA会長の処に泊めて頂くことになった。この時の会長が日本の方で、奥様はハリウッドのキム・ノバークの様な方だ、とチンピラは思った。この方がアメリカの心臓外科医の幼児手術の名医だった。ここで無縁だった東大との関わりが初めて生まれた。この時、チンピラの置かれていた海外講師の意味の大きさに驚き、招いてくれたグリーンヒル・スクールの、度量の広さに改めて尊崇の念を抱いた。



グリーンヒル・スクールのお別れ式

PTA会長のドクターは日本に帰国する度に、東大の医学部から講演依頼が入る、心臓外科医の名医だった。そして更なる感激は、グリーンヒル・スクールは進学率がダラス・ナンバーワンの、私立の有名校だった。

つまり、チンピラの教えた幼稚園から高校までの、2000人の生徒たちは、やがてはハーバード大学や世界の有名大学に進み、アメリカのリーダーに為るエリートの玉子だった。

ならば東大とも無縁ではない。

ところがこの頃になると、チンピラは、すっかりアメリカの度量の凄さに身を委ね、アメリカを十分に満喫できる経験を重ねていた。

何故なら、もう6度目の渡米だった。

ところがここに至って、会長のドクターから驚くべき話が出た、会長の東大時代の同期生が、なんと山水画の研究者だと言うのだ。信じられない思いだった。実際に「山水画とは何か」という本を見せられ、これを一晩で読み尽くした。

私は今日まで山水画を書きながら、「山水画とは何か」を極めようとしていた。ところが筆を持たない学者、つまり机上の研究者が書いた「山水画とは何か」を読んで、その内容の凄さに驚いた。ことごとく同感できる文章だった。

通常は学者の論説に対して「無茶苦茶だ」と思うことは合っても、「その通りだ」と思うことは無かった。それなのに日本を遠く離れたアメリカの地で、同感できる論説に出会えたことは、チンピラには戦場で援軍を得た思いだった。

それ程に日本猿チンピラには、アメリカの暮らしが厳しかった。何故なら日本に居るときのチンピラとは、余りにもかけ離れていて、生活環境の極端なギャップが、尋常では無かった。

三 尼寺

チンピラは、朽ちかけた知多の尼寺に住んでいた。ここに至る前のチンピラは、東京

目白のカウンセリング・センターに10年程関わり、東京で暮らした。ところがカウンセリング・センター理事長から突然引導を渡され、センターを去る事になった。とりあえず落ち着く先の無いチンピラは、生まれ故郷の祖母を尋ねた。この時偶然出会ったのが地元の寺の住職だった。



筆者の住まいする照徳寺

「和尚さん、何処か私の住むところは有りませんか」

と尋ねると、住職は「尼寺が空いている」と言う。この一言で、チンピラは寺に住む事になった。

案内された尼寺には靴のまま部屋に上がった。とても靴無しでは上がれない状態だった。でもお堂だけは、御詠歌の人達が使っていて綺麗だった。チンピラは、とりあえずこのお堂に住むことにした。

ここから寺の修繕が始まった。手始めに屋根に上り、ずれている瓦を一枚ずつ上に押し上げてみた。しかし雨漏れは止まらなかった。仕方無く業者に頼んだ。お金の無いチンピラは、気安く業者に修繕を頼む事は出来無かった。風呂も釜戸も総て自分で直した。水は井戸水だった。この井戸水には鉄分が混じっていて、洗濯する度に連れ合いが嘆いていた。

特に大変だったのはトイレだ。トイレの汲み取りのホースが寺までは届かず、市の

清掃車が入れなかった。仕方無く甕を幾つか埋め、そこにトイレから桶でくみ出し、更にもう一度甕に移してから下肥として土にかえた。まるで江戸時代そのものの様な暮らしをしていた。しかしこの暮らしが、チンピラには理想境と重なった。得難い喜びの日々であった。

この寺は阿弥陀堂と言って、お堂の建てられた230年前より、もつと以前から、ここに阿弥陀堂があった、と古文書に書いてあった。その所為なのか、私の連れ合いは、なぜか阿弥陀さんの様な人だった。観音さんでは無い。観音さんはなんとなく艶やかで社交的なイメージが有るが、そうでは無かった。物静かな阿弥陀さんのような、居るか居ないか分からないような、「無私の人」であり。苦労を苦労とも思わず、どんな悲惨な境遇でも、それを当たり前の事として受け止め、決して動じない。異常とも見えるほどの見事さを、連れ合いは備え持っていた。チンピラは寺に住んで間もなく、結婚式を上げ子供二人も無事に育った。これは総て連れ合いの力であり、チンピラは疑いも無く、阿弥陀さんのお陰だと思った。それほどに見事な「無私の人」、それが連れ合いだった。しかしチンピラはしょっちゅう大声で怒鳴っていた。毎日毎日大声の止む時は無かった。つまり阿弥陀さんを、毎日怒鳴りつけて暮らしていたのだ。

チンピラは寺に入る前から、なんとなく自分の生き方を決めていた。心理学の研究もその一つだ。そしていよいよ修行の道場で有る、寺に入る事になったからには、寺に入っただけの何かを成さなければならぬ

と思った。そして一年後、ついにベラボーな答えを出した。それは時代錯誤も甚だしい非凡な覚悟であった。

チンピラはこの事を誰かに伝えたいと思った。このベラボーな結論の意味の解る人に、チンピラは伝えて置きたいと思った。しかし見つからなかった、連れ合いにも話さなかった。しかしチンピラは、なんとなく阿弥陀さんには、伝わっている思いがして、いつの間にか話す必要がなくなった。だから黙って実行した。

ならば何を実行したのか、それは「自分には絶対に出来ない、一番難しい事、それをやる事にしたのである。この思いは連れ合いを見ていて、思い付いたのかも知れない。とにかくチンピラにはこれまで縁のない、絶対に実行出来ない事を、実行する事にしたのである。

それは、「自分を卑下して生きる」という事であった。

誰よりも、どんな人よりも、自分を世間の下に置いて生きることを、自らに課したのである。

この事が実行出来るなら、チンピラが寺に住んでも、阿弥陀さんは許してくれるだろうと思った。こうして寺に住むことになった。

住職から、何度も

「僧侶になりなさい、そうすれば生活も安定するし、村の人も喜びますよ。」

と諭された。でもチンピラは聞き入れなかった。

それどころか、チンピラは住職に向かっ

て。

「僧侶になれば墮落する」

と言って断つたのである。

これ程までに心配して下さっている住職の心を無視して、チンピラは自分の覚悟のために、卑下して生きる花向けとして、最後の見えを切つたのである。

ここからいよいよ、尼寺の生活が始まった。

こうして荒れ果てた尼寺に住んで、瞬く間に40年の時が過ぎ去って行つた

四 墨の海外講師

この間に、アメリカで揮毫企画が次々と作られた。その都度生活環境の異なる、天と地ほどのギャップに、チンピラは必死に耐え、懸命に墨の文化の講師として、この困難を務め抜いた。日本に居れば、だらしく手足を伸ばし、気の向くままに暮らす生活だったチンピラは、アメリカに来て高い地位に嘯き、海外講師の重責に挑む授業は、監獄暮らしより厳しい、究極の修煉だった。

それはもしかしたら、プチ総理大臣の様であったのかも知れない。

この後、帰国してすぐPTA会長の同期生、跡見学園の教授を尋ねた。この時テレビの取材依頼が有り、私の揮毫収録の中でコメントを頂いた。しかし「山水画とは」を語って頂けるだけの時間は無かった。しばらくして、癌で亡くなったとの訃報が届いた。無念だった。もっと多くの対話をして見たかった。

この様な出来事が、人間には躊躇無く襲

い、止む事の無い有情無情の人間界に生きていけば、人間は、理想境を思い描く境遇に陥って行く、これが人間だ。だから人間は、理想境を求めなければ成らなかつた。この理想境を具象図として表わした物が、文人の山水画だった。このような文人画論を、研究者と交わすチャンスをも、チンピラはいっぱい得たいと思つた。

尼寺に住み始めた頃のチンピラは、海外旅行とは無縁な暮らしをしていた。それでも外国旅行をする人々が、急激に増えていく日本の経済成長を見ながら、自分には無縁だと思つた。

そんな時だった、千葉の芝山仁王尊観音教寺で「襖絵コンクール」が企画された。この時の最優秀賞がチンピラだった。この賞にはフランス旅行の副賞が付いていた。チンピラはフランスから帰ると直ぐ、アメリカの友達にフランス旅行の詳細を伝えた。するとレストラン経営で成功していた友達が、店の壁面に飾る11mの屏風揮毫を依頼してくれた。これを機にダラスの日米協会や、小中高の学校や幼稚園からも、揮毫依頼が舞い込んだ。

チンピラは屏風や掛け軸を作り、アメリカに飛んだ。初めてのアメリカ旅行は総てが異例だった。知多半島から出て来た田舎者には、ジョン・ウエインの西部劇を見て想像していたアメリカとは、遙かに異なる現実に驚きながら。毎日揮毫予定を必死でこなし

驚きの初めは、ダラスに着いた次の日だった。市の機能は総てマヒして、見る限りの世界が凍り付き、私のダラス美術館での揮

毫予定も消えてしまった。仕方なくこの中止の合間に作品を書いた。アメリカに招待してくれた、日本食レストラン「ミスターすし」のオーナーの為に、沢山の仕事をした。



ミスターすしの屏風揮毫

やがてお店にある畳の部屋で、客に揮毫場面を見せながら、着物やワンピースに絵を書き、希望者に作品を買って貰った。日本から持ってきた額や軸に加工した作品や、アメリカで新たに作った作品を並べた。すると商品は飛ぶように売れ、僅か1週間で1万ドルに成った。このお金は、円ならアメリカから日本の口座に、直接振り込む事が出来ると言われ、自分の通帳に初めて大金を振り込んだ。しかしこれが最初で最後だった。

この夜クラシック指揮者の岩城宏之氏から、デザイナーのお誘いがあり一緒に一緒にテレビで見ただけの有名人でしたが、とても話し上手で、田舎者のチンピラに対して、面白おかしく世界の街角に有る、美味しいお店の話をついば聞かせてくれた。私はこのような方が一流なのだと思った。若い奥様も一緒に一緒だった。

次の日がチンピラの大舞台だ。「日本の心」と題して一時間ぐらいの講演をした。200名程の人が集まり、無と有、無為と有為、無心と悟りについて、日頃考えていた「日本の心」を話した。この後屏風に山水画を揮毫した。

揮毫とは、書は一瞬に書くから揮毫(筆を揮う)と言うが、チンピラの画は書と同じで、理想境と言う抽象の世界を、一瞬で描き上げる画法であり、この揮毫画は書きそうで見ればこの難しさがよく分かる。なぜなら、墨の線は書き直しが許されないのだ。一度書いた線を書き直せば、美しい墨色が消え、見るに堪えない醜い墨色に化けてしまう、これが墨の特色である。この特色はまるで人生と瓜二つであり、失敗は絶対に許されない。一度限りの一歩であり、この一歩の連続が人生であり、墨ならば山水画である。この墨の特色は子供でも見分けがつく、一目了然の常識だ。だから墨の絵の二度書きは絶対に出来ない。一度書いた線はそのまま生きた線として、絵の中に生きていなければならない。それ故にこの画法は極めて難解であり、画家の絵より価値が高いとされて来たものだ。

こうして幾千年の時を経て、受け継がれて来た人間の理想図が、中国や日本にはあった。しかしこの理想図を書ける人が居なかった。チンピラはこの事を知ると、自ら筆を執り、文人画とは何であるかを手探りで求め、今日に至ったのである。

この難しい墨の特色を生かして挑む揮毫

は、自己自身の生きる姿勢を問う修行で有り、心の乱れ、呼吸の乱れが一筆の線に現れ、揺れ動く心の機微を、自分自身で確認できる見事な物、それが墨の線だったのである。

この画法をチンピラは人々の目の前で揮毫した。キャンパスは必ず表具師の仕事が済んだ、完成した襖や屏風であり、ここに何時も直接揮毫した。つまり失敗は許されないのだ。これがチンピラの書き方だ。この書き方には、見て居る人に、物事の真実が見えるかどうかを問う目的があり、この意味に気付いてくれる人に、チンピラは出会いたいと思った。何故ならチンピラは、失敗が許されない土壇場に自分を追い込み、渾身の一筆に成否を託し、この困難な揮毫に立ち向かっていったからである。これはまるで「生死を懸けた」格闘技そのものだった。だからこの事実を解ってくれる人に、チンピラは出会いたいと思った。しかし会えなかった。

チンピラは、もう日本には「武人」は居ないと思った。

虚しい現実だった。

五 落書きの始まり

その所為かチンピラはこの揮毫に、更なる究極の困難を加え、これを揮毫する事になった。この書き方は、チンピラの意志で行ったものでは無い。必然的にここに流れ着いたのである。

この画法とは、100人程の一般の人々が、襖に落書きの線を書いた後、この線を使

って人々の目の前で揮毫する、非常識極まりない書き方であった。これは歴史上にも例のない画法だ。しかしチンピラが作った画法では無い。

「これは天から下された偶然から生まれた画法だ。」

それは、もしかしたら美術界のSTAP細胞なのかも知れない。何故なら他人の書いた線が、絵の中に違和感なく取り入れられ、あらゆるものに変化し、山水画に成っていくからである。このような非常識な画法に、チンピラは懸命に挑んだ。

この画法が、生まれる事になった切掛けは、チンピラを怒らせる処から始まった。チンピラは唐突な無礼を、受け入れることが出来なかった。しかしチンピラは怒りを耐え、我慢した。

これは、芝山仁王尊観音教寺と言う、通称成田山の奥の院と呼ばれていた、歴史ある寺が、襖絵が必要に成り襖絵作家を探した。ところが作家が見つからなかった。そこで朝日新聞に作家募集の記事を載せた。この記事をチンピラの友人が見つつけ、知らせてくれたのである。この知らせがチンピラの揮毫人生の始まりで有り。大舞台へと発展していく一大事となったのである。

この新聞記事を知らせてくれた友人は、東大のカウンセリング研究会に参加していた。この時の東大の教授は、チンピラが、自宅まで研究資料を二度ほど届けた事の有る、当時はまだカウンセリング・センターの理

事だった。チンピラは資料を届ける度に、先生と奥様の印象がそっくりだと思った。

ところが、この様な揮毫人生を作ってくれた友人なのに、なぜかチンピラには会いたがらない。フォーカシングのリーダーになり、講師として各地で研究会をするようになり、チンピラなど会うに忍びない者になったのかも知れない。ならばチンピラの自業自得だ。しかしチンピラには得難いチャンスを与えた、感謝すべき大切な人なのである。ところがお会いして話して居ると、なぜかチンピラの声が次第に大きく成り、フォーカシングの研究者の話しに、異論を挟みたくなくなってしまふのである。

ところが、芝山仁王尊観音教寺の時の、無礼な一声には、チンピラは耐えた。もしあの時、怒りを爆発していれば、今日のチンピラはなかった。

芝山仁王尊観音教寺の「襖絵コンクール」には、6人の画家が選ばれ、寺に泊りこんで書き競うことになった。その内の一人がチンピラである。チンピラは墨をすり、呼吸を整え、いざ書き始めようとした、その時。

「おい、俺に一筆書かせろ。・・・この線を使って、末代まで残る襖絵を書け。」

と言う声が掛かった。チンピラは啞然とした。

「作家を何だと思っているのか、この侮辱は許す訳にはいかない」
と怒った。でも耐えた。

手先の震えを抑えながら、チンピラは無礼な声の主に筆を渡した。

この時、チンピラがここで怒りを爆発して居れば、即刻退場となり、知多に帰されてしまうだろう、とチンピラは思った。だから耐えた。

これが落書き揮毫の始まりだった。この唐突な一声がなかったなら、チンピラの揮毫人生は生まれなかった。

だからこれは、「天から下された、チンピラへの守護神の一声だった。」とは言えないだろうか。

この後、住職と副住職にお願いして、新しい襖に四本の線を書き入れて貰った。これを真夜中の一時から書き始め、早朝には襖絵が書き上がった。チンピラは夜の明けるのを待って、住職と副住職に見せた。

チンピラに最優秀賞が決まったのは、この時の住職の感激が、この結果を産んだのだろう、とチンピラは思った。

このコンクールの副賞は、パリ旅行だった。

六 パリ旅行

この時のチンピラは、まだ海外旅行の経験がなかった。

パスポートをとり、ビザを取得する為にフランス大使館へ単身でたずねた。旅行手続きやマナー等、ガイドブックを買い、くまなく読んで必要な物を揃えた。大使館を訪

ねた時には、もうこれでフランスへ行けると思った。だが一人旅だ。日本猿にフランス語が分かる筈は無かった。

それでも出国手続きや荷物預け、機内で書く入国手続きの記入も出来る様になった。しかしこれは旅行業者の同行するツアーではない。ホテルも予約していない一人旅だ。それでもフランス・パリに着いてしまえば、日本猿でもなんとか道が開けるだろうと思った。この安直な思いがただ一つの頼りだった。チンピラはこの頼りを元に成田に向かった。芝山仁王尊観音教寺は成田空港の近くに有り、フランス旅行の報告を兼ね寺に寄った。寺に着くと住職から、パリで寺の埴輪展をやっているの、館長に手紙を届けて欲しいと頼まれた。こうして次の朝、成田空港まで副住職に送ってもらった。いよいよ一人旅だ。

先ずフランス・ドゴール空港行き、ターミナルへ行かなければならなかった。しかしまだここは日本だ。だから尋ねれば何とも出来た。チンピラはドゴール空港行き搭乗口で、団体客を探した。個人客でもいいと思った。自分と同じ画家か、芸術家を見付けようと思った。もし見付ける事が出来れば、同行をお願いしてホテルまで付いて行き、そこで部屋を予約しようと思った。しかし心配は一瞬にして消えた。以前チンピラと関わりのあった出版社が、パリ旅行の団体客を連れて搭乗口に並んでいたのだ。これぞ天の助け、と、添乗員に同行を頼んだ。総てOKだった。それどころか、中国の墨絵の先生がパリで個展をしていて、その先生と同宿することになった。願っても無い最高の条件が、早々に整ってしまった。

こうしてチンピラは生まれて初めて、海外旅行に行ったのである。

アラスカ空港で給油中に飛行機から下り、酷寒の大地に立った。もう日本では無いと思った。再び飛び立つと飛行機の窓に、なんとオーロラが、色や形を変えて輝いていた。チンピラは一番後ろの空いた席に移り、オーロラを見続けていた、途中でスチュワードスがコーヒーを持って来てくれた。格別の美人に思えた。私以外にオーロラに気付いている人はいなかった。機内放送すれば、文句を言う人がいるのだろうかと思った。夜が明けて、ドゴール空港上空に差し掛かると、やっと機内放送があった。

「空港は霧で視界が悪く、うまく着陸できるかどうか解らないが、3度挑戦する」と言う案内だった。機内は一瞬緊張した。しかし無事に一度の挑戦で着陸すると、機内に大拍手が起こった。

こうしてパリの地に下り立ったのである。

凱旋門に行きルイビトンの本店で、連れ合いのために財布のお土産を買った。チンピラはこれでひとまず良し、として、モンマルトルに行った。テルトル広場で絵書きの玉子達が、絵を描き売っている広場で、なぜか長い時間をすごした。

「頑張つて下さい、」と、心で手を合わせ、ムーランルージュへ行った。店先に風車の有る、有名な建物を見ながら店に入った。薄暗い店内は満席だった。スポットライトに照らされた舞台上、下着のまま足を上げて踊る踊子様子は、日本のストリップ劇場だった。パリの人達はここで「馳走を食べ、シャンパンやワインを呑みながら、賑やか

な時を過ごした。この時宝塚の大スターだった日本の踊り子も、何処かにいるはずだと思ひ、見付けようとしたが、見付けられなかった。店を出る時に、封をしたまま残っていたワインを、ポケットに入れて持ち帰った。後でこの周辺はギャングの街だと聞き、見つかつていれば用心棒に、袋叩きにされて居たかも知れないと思つた。このボトルは、言葉が通じ無いチンピラに、フランスの事をいろいろ教えてくれた、ホテル近くの気の良いフランス人に渡した。

次の日ノートルダムやルーブル美術館に行き、オルセー美術館にも行つた。ルーブルの館内では、涙が止まらなかつた。そこに治まつている総ての名画が、悲惨で残酷なヨーロッパの歴史の生き証人として、チンピラの胸に迫り、「このヨーロッパには、神の存在なくしては、人々は生きていられなかつた」と言う強烈な思いに襲われ、泣きながら、館内を見て廻つた。モナリザも当然見た筈なのに、なぜか記憶に残っていない。

この後オルセー美術館に行つた。チンピラはまた泣いた。印象画の名画を見ながら進んで行くと、出口近くにゴッホの自画像があつた。チンピラはこの前に立つた瞬間、一気に涙が噴き出した。バンゴッホに強烈な一撃をくらつた。何故なら、ゴッホの絵は総て線で描いてあつた。この後ポンピドー・センターにも行つたが、勢いよく太筆で書いた、作品もあつたが、ゴッホとは比べようもない甘い線だつた。そしてセーヌ川船上で夕食をとつた。総てが夢の様なひと時だつた。でも「あの日本人、何で泣いているのだらう」と大勢のフランス人は思つたに違いない。

ところが是より遥かに凄ひチンピラの子ヤンスが、パリには有つた。

同行させて頂いたフランス旅行の人達が、大丸デパートの入つている国際会議場のあゝ、バル・デコングレと言うビルの上階で、作品展をしていた。この会場には使われて居ないパネルが、襖を並べた様にセツトされていた。チンピラは即座に、揮毫許可を主催者に求めた。この時、さすがこれがパリだと思つた。日本ならとても許可など出ない唐突な申し入れなのに、なんと一つ返事でOKがでた。しかし墨や筆がない。ところが私の同部屋の中国人は、ここで水墨画の個展をしていた。チンピラには何もかも都合だつた。これで揮毫準備はすべて揃つた。ここで縦2m、横11mのパネルに揮毫した。この作品を、パリ・ロックの警察所の署長が目留め、欲しいとの申し入れが有り、帰国したチンピラに許可を求める電話があつた。なんと作品は、パリ・ロックの警察所会議室に掲げられた。ただし作品が大き過ぎるので切つてもいいかと聞かれ、文句など有る筈はなかつた。ロックは東京ならさしずめ銀座だ。

七 ミスターすしとスパースター

この実績が功を奏して、アメリカの企画が次々と作られた。

この、アメリカの初の揮毫企画が、日本人補習校だつた。ところがこの日本人補習校の廊下に立つたとたん、目を疑つた。「銃を持つてくるな。ドラックを吸うな。」と、壁一面にデカデカと表示されていたのだ。その時、10年後には日本もこうなるのか、

と思った。

この後ジェットロでも屏風に揮毫した。この他に複数の学校や幼稚園など、十数ヶ所の揮毫をこなした。

そしていよいよ日本食レストラン「ミスターすし」の壁面に飾る、11mの屏風揮毫だ。しかしこの時は、日本から送った屏風が前日の夜になっても届かず。仕方なく壁面に直接書く覚悟でチンピラは床に着いた。ところが朝来て見ると、無事に屏風が取り付けられていた。ひとまず安堵した。



ロジャースターバックに額を献上

しかし今度は、当日予定時間に成っても特別ゲストが来ない。飛行機が遅れていると言う連絡が有り、アメリカンフットボールのスウパースター・ロジャースターバックの、金屏風入筆のデモンストレーションが出来ない。急遽常連客に一筆ずつ金屏風に、墨の線を書き入れて貰い、これを取りあえず山水面に書くことにした。

するとたちまち50人程の線が、金屏風に書かれた。チンピラはまだこの時点では、落書きの線を使って揮毫する経験は僅かであり、30人ぐらいならいける、と思っ

た。しかしアメリカの人達は喜んで入筆(落書き)をした。この事が有ったお陰で、100人の落書きが襖四枚に書かれても、これを仕上げる事が出来る様になった。屏風は一对で一つとして数えるので、6枚繋がり物が2つ有り、一つをロジャースターバックの為に残し、片面から書き始めた。

午後になつて、ようやくロジャースターバックが「ミスターすし」に到着した。

アメリカンフットボールのスウパースターだ。

その人気は、日本の王と長嶋の二人を合わせたような、超有名人だと説明された。

チンピラは、このスウパースターと握手した。

通訳に、この方は次期大統領候補だと紹介された。チンピラは即座に、

「大統領に当選したら、ワシントンの桜広場に100mのキャンパスを用意して下さい。」と、お願いした。

答えは「イエス」だった。

しかし実際にはブッシュ二世が大統領になり、この話は消えてしまった。

チンピラは、自分の作品を額に入れてスターバックに贈った。スターバックからはサイン入りのフットボールのボールを貰った。

数日後に、額を事務所に飾ったから、見に来いと言う連絡が有り、スターバックの事務所を尋ねた。

すると大統領とスターバックが写った写真があり、その横に家族の写真があった。そ

してその横にチンピラの山水画が飾ってあった。これを見てチンピラは、「有り得ない奇跡だ」と思った。

しかしこれは事実だった。

チンピラが帰国する最後のパーティーにも、ロジャースターバックは来てくれた。

チンピラのパーティーに王と長嶋が来る事など、絶対に有りません。

ですからこれは、奇跡のような本当の事実だ。

八 入国拒否

この後、アメリカの入国を拒否されるといふ、アクシデントが、チンピラの身に起こりました。

グリーンヒル・スクールの時でした。アメリカ一人旅も慣れて、つい入国目的を観光ではなく、ビジネスにチェックして用紙を出した。それを入国審査で指摘され、「ビジネスならビザが違う」と言われ、英語の解らないチンピラは、自分が怪しい者では無い証拠として、一番見せてはいけない物を見せてしまった。なぜならグリーンヒル・スクールの契約書には、僅かではあるが、1000ドルのギヤラが書かれていた。ドルを稼ぐにはビジネスのビザが必要だった。通訳が来てくれた時には、もういくら弁解しても受け入れてはくれなかった。頑丈な5人の警察官に、ブロックされながら尋問される姿は、アメリカ映画そのものだった。なぜなら、5人の警察官が両腕に入れ墨（タツ）を入れていたのだ。

この時、もしかしたらと思ひ、チンピラは

警察官に、

「俺はロジャースターバックと友達だ。大統領に当選したら、ワシントンの桜広場で俺のデモンストレーションを、約束している仲だ。」

と云って見た。すると警察官達の顔が緩んだ。チンピラはすかさず、

「ロジャースターバックはブッシュ大統領とも友達だ。」

と云って見た。5人の警察官は暫く相談していたが、結論をいった。その一言はさすがアメリカだと思ふ素晴らしい結論だった。

「いいだろう、入国を許可しよう。」

「エッ・・・」

と思ひました。

「ただし大統領から、直接入国許可の電話を、ここに入れる様に手配してくれ」と言う返事だった。

私はそのまま、次の便に乗せられ日本に帰国した。そして次の日、ディスカウトでは無い正規の高い航空券を買い、シカゴ空港乗り換えでダラスに行った。何時もの空港のポートルランドでは、なんとなく気が咎め、ギャングの街シカゴ空港に、チンピラは降り立った。国内線乗り換えのために、先ずダラス行きターミナルへ行かなければ成らなかった。チンピラは日本人かも知れないと思う人に声を掛けたが、中国や韓国の人だった。途中で一度だけ、渡米前に必死で覚えた英語で、空港内の清掃をしている人に、ダラス乗り場を尋ねた。ところが答えてくれた英語の意味が解らず、指差すと、領いてくれたので、その方向へ行った。すると乗り換え出口だった。そこには以前「ミスターすし」でお会いした女性が待っていた。チンピ

ラには女神に見えた。この手配は「ミスターすし」のオーナーの優しい配慮だった。

この時は、アメリカ万歳の気分だった。

しかし、シカゴ空港で国内線に乗り替えると、もう日本人の姿はなく、日本の気配は何処にも無かった。チンピラは初めてアメリカに来た、と思った。国際線なら日本語の機内放送もあり、日本人の姿も有るので、まだ本当の国外ではない気分で見られる。しかしここはもう国内線の機内だ。途中でトイレに行きたくなり、「エックスキューズミ―」と言って拘りなく立って行く自分に、なんとなくホッと安堵した。

ダラスに無事に着き、数日後にリゾート地ラスコリナスへ行った。歌にも歌われていた夢の街ラスコリナスは、まさしくチンピラには別天地だった。街の様子が洗練されていて、隙の無い夢のような佇まいだった。それはまるで、罪深い罪人が、間違っただ天国に入り込んだ様な、チンピラには立ち位置が定まらない、素晴らしい街だった。

この数年後に、フォートワースにも行った。ダラス市の隣に。アメリカの開拓時代が今に残る、京都の映画村のような街だ。しかしこの街は、西部劇のジョン・ウエインが今にも現れそうな、本当の西部が今に残る貴重な町だ。このフォートワース市と田中角栄総理大臣の長岡市とは、姉妹都市であり。長岡の有名な花火大会に、フォートワースから市長一行が来た。その時、なぜかチンピラも誘われ同行する事になった。この時もまた驚く事がおこった。花火の栈敷席に、ご一行様の座る席が有り、チンピラも後から

続いて栈敷に上った。ところがチンピラの座る席がなかった。しかし市長の隣がなぜか空いていたのだ。恐れ多くもチンピラ風情が座る処では無いと思っただが、他に座る処はなかった。こうして思いがけずフォートワース市長と並んで、長岡の花火に酔いしれたのである。ところがその席に通訳がいて、フォートワース市長にチンピラは紹介され、前もって持つてくる様に言われていた作品写真を、市長に見せる運びになっていた。しかしフォートワースでは、チンピラの揮毫企画はできなかった。

それはともかくとして、本来なら田中角栄総理大臣か座るべき処に、不肖私、チンピラが代役として花火見物のお供をしたのである。

これは豪気な事だったのではないだろうか。

つくづく、人生とは面白い、とチンピラは思った。

八 ダラス市のキー

しかしまだこの程度では、治まらなかった。

アメリカダラス美術館の、メインイベント。ダラス日米協会主催の「金屏風揮毫のデモンストレーション」が再開される事になった。一度は一夜にしてダラスが凍て付くアクシデントがあり、中止になった予定が、再開される事になったのである。



ダラス市のキー

美術館正面玄関を入ると、デモンストレーションの表示があった。巨大な美術館だった。指示に従って行くと、チンピラの揮毫企画案内の表示があった。会場は階段席のある小ホールで、大学の教室の様だとチンピラは思った。

日本で作った金屏風が既に置かれ、収録のためのカメラや音声、証明などの準備をしていた。チンピラも揮毫道具を準備して、墨を磨った。気持ちを集めるには、何時もこの墨磨りが欠かせなかった。ところが今回だけはその余裕がなかった。これまでにアメリカで知り合った多くのアメリカ人や日本の方々から、声を掛けられれば、応えなければ成らなかつた。この様な立場を「嬉しい悲鳴」というのだろうか。とにかくとても集中出来る状況ではなかつた。やがてダラス市の副市長が来て、続いて様々な方々の紹介を受け、握手している内に時間が来てしまった。初めに副市長の挨拶が有り、次にチンピラが紹介された。この時副市長からダラス市のキー（鍵）がチンピラに渡された。名誉の称号をチンピラが頂いたのは、これが初めてだった。

後で知らされたが、このキーは、モナコの王妃グレース・ケリーやイギリスのチャールズ皇太子にも渡された鍵であった。

これを聞いた瞬間、チンピラの手の中に
有るキーが、急に重くなった。

これもまたチンピラには有り得ない、奇跡の様な事実だった。



ダラス副市長と筆者

この後、ダラス市庁舎に招かれ、市議会の議事堂に飾られているチンピラの屏風が、毎日テレビで放送されていると説明された。しかし確認する機会はなかつた。こうして副市長と三度お会いした中で、「日本の町と、友達関係の友好交流が出来る処はないか」と聞かれた。副市長はダラス日米協会の会長で有り、ダラス市のロータリーの会長でもあった。ダラスはコットンの産地で有り、チンピラの住む知多市は、木綿工場の街であった。豊田佐吉が自動織機を作る切掛けとなった所だ。

チンピラは帰国すると先ず知多市長を訪ねた。市長は織布会社の社長で有り、私の話

しに乗り気になった。しかし知多市のロータリーの会合で、市長がダラス市との友達関係の話をしたが、誰も乗ってこなかった。「ダラス市と知多市では、同じロータリーでも、格が違い過ぎる」という理由だった。だから話は流れた。

しかし知多市長は、単身でダラス市に行つて来た、とチンピラに報告してくれた。

物事は上手くいく場合と、行かない場合がある。この分かれ道には、何が有るのか分からないが、物事は二つに分かれて行く。もし、行けなかった道を行くことが出来たなら、そこにはどんな世界が有ったのだろうか、と、チンピラは思った。



ダラス美術館の揮毫

この数年後に、ダラス美術館から再度依頼があり、美術館正面玄関の大空間の真ん中で、屏風揮毫の企画が組まれた。これも、チンピラには有るはずの無い事実だった。

この時ダラス美術館では、中国の画家の一派、浙派の大展覧会が行われていた。浙派とは、日本の雪舟が中国に渡り絵画を習った一派であり、中国を代表する歴史上の一派だ。その一派の膨大な作品を集め、メトロポリタン美術館とダラス美術館が、三ヶ月ずつの長期展覧会をしていた。この中で、ダ

ラス美術館は「墨の絵のデモンストレーション」を企画してくれた。「墨の絵はどのようにして書いたか、」を見せる為に、揮毫をチンピラに依頼したのである。

ところがこの時ダラスの美術館長が、サンフランシスコの東洋美術館長に栄転することになった。転任したら、チンピラの揮毫企画を考えてくれる話だったが、これは実現しなかった。チンピラに英語力が無く、通訳の居ない交渉では、交渉には成らなかった。

他にもこれと似たような事があった。それは浙派の本場、中国での話である。

十 中国揚州の大明寺

これこそ、有り得ない出来事の中の、最高の出来事だった。

ある時、中国揚州の大明寺の方丈、能修様が、突然チンピラのアトリエを訪れたのである。これはチンピラの文人画人生にとって、極めてまれな本当の話だ

なぜなら能修様は、鑑真和上の位を現代に受け継ぐ高僧であり、大明寺は文人画呉派の本拠地、江蘇省に有った。この隣には雪舟の習った浙派の所在地、浙江省もあった。



石涛の墓と筆者

この大明寺には中国を代表する石涛とい

う、チンピラが最も好んだ山水画家がいた。この人は明の王の血を継ぐ方であり、この縁を隠し、僧侶に成って山水画を書いていて助かったのである。これ程までの歴史有る寺の住職能修様が、奈良の唐招提寺に来たその足で、知多のチンピラのアトリエに来て下さったのである。これは歴史に残る重大事だ。だから有り得る筈の無い、異例中の異例な事実だった。

能修様は奈良の唐招提寺を造られた、鑑真和上の高位を、現在に受け継ぐ方で有り、中国仏教界の重席を担う方である。そのお方がチンピラのアトリエを、お尋ねになつたのである。

奈良に胡錦濤主席が行かれた時に、たまに奈良にいた能修様が、東大寺貫首と供にお迎えした写真が、中国新聞の表紙に載っているが、これを見れば、位の高さがおのずから分かる写真だ。この高僧能修様がなんの為にチンピラを尋ね、わざわざアトリエに来る必要があつたのか、この問いの答えが、有り得る筈の無い、信じ難い話 شدつた。

大明寺の本堂は中国の国宝だ。中国は文化大革命の時、紅衛兵によって仏像は燃やされ、仏塔や仏閣までが破壊された。しかし大明寺の本堂だけは、周恩来首相の日本への仁徳な友好的熱意の計らいで、燃やされずに残った。この昔のままの本堂は、中国の国宝に指定された。この国宝に「有りうる筈の無い話」能修様からチンピラに伝えられたのである。

しかしこの話は消えてしまった。

だから、今ではもう何でもない話ですが、この事実が有った事だけは、書き残して置きたい。

能修様は、この中国の国宝で有る、大明寺本堂壁面の十六羅漢像の上に、長さ約30mの、山水画を書いて欲しいという依頼だった。

これは有り得る筈の無い話しだ。だから有り得ませんでした。

でも能修さまは、

「唐招提寺には、東山魁夷の襖絵があります。大明寺の本堂には、不譲先生の山水画を書いて下さい。」

と、チンピラに、依頼されたのである。

以上、これまで書き連ねて来た事は、総て本当に有った事実です。

だから、有り得る筈の無い事実が、本当にあつたのです。

金メダルを約束されていて取れなかった選手と、もしかしたらチンピラ的心情は、似ているのかも知れません。

こんな処がチンピラの限界です。今一歩のところ、何時も超巨大な企画は実現できずに、チンピラの前から消えて行きます。

これがチンピラの、器量です。

十一 看護連盟会長

でもチンピラの旧友に、これを成し遂げた人がいました。

チンピラが赤門の前を、散策していた頃より、もう少し前、東大にも看護学科が出来た。その一期生の方と、チンピラは北海道の定山溪で知り合った。カウンセリング研究会があり、終わった後5人の仲間と北海道の旅をした。この方達とは、東京に帰ってからも幾度も再会した。ピアノに合わせ懐かしい歌を歌い、楽しい会話をして夜遅くまで遊んだ。

その中のお一人が東大で大暴れした、いや大活躍した。東大看護学科に教授が居ない不都合を指摘し、教授を置くようにした。この後、東京女子大学の教授を経て千葉大に移り、それまで男性の医者しか勤めた事の無い部長職を勤め、更に看護協会の会長になり、そして更に長野県に看護大学を設立し学長になった。そして最後に看護連盟の会長になったのである。この様な実績を残した方が、チンピラの昔の仲間だった。

友達呼ばわりするには恐れ多いのですが、神宮参道に建つ、黒川紀章設計の看護会館の会長室を尋ねると、昔のままの対応で迎えて頂き。チンピラには嬉しい思いの再会だった。自然体の中に、自から風格を備え持つ、そんな方だったのだろうとチンピラは思った。何故なら、常にチンピラと同じ位置に立ち、相手をしてくれる、普通の友達だったからだ。皇后陛下美智子様が、葬儀にも参列され、メッセージが届いたという、斯くの如き結果が、事を成し遂げた人の、最後のなだとチンピラは思った。

ところがこの方が「私などは、まだまだよ、」と言われた。

何故なら、何時もピアノを弾いて、歌って遊んでいたお宅には、妹さんがいた。その方が、なんと。

「国連に勤務されていた時、担当の部署がノーベル賞を受賞した。そして津田塾大学の学長になった。」

この方のお姉さんとは、今もお付き合い頂き、チンピラの襖絵揮毫に数回参加して頂いた。大分にお住まいになり、ご高齢にも関わらず、今も論文の書き方を指導している。

チンピラはこの原稿が書き上がったら、最初に見て頂こうと思っている。

チンピラの旧友には、余りにもチンピラには恐れ多い方達ばかりだ。

十二 東大への提言

ところが、このチンピラをモルモットにして論文を書いた後、東大の大学院の准教授になった先生がいた。

でもチンピラ風情を、どのような論文にしたのでしょうか。

その訳をチンピラは知りたいたと思ったしかし論文は英文だった。東大の先生は「読まれると困るから」と、笑っていた。

この東大の先生の先生、アメリカの指導

教授は、ノーベル経済学賞の受賞者だった。

ならばチンピラの果たしたモルモットには、どんな意味があったのだろう。

その訳を、確とご覧下さい。

学問とは何なのでしようか。東大紛争も、この学問への疑念から起こった、学生の葛藤ではなかったのでしょうか。

人間懷疑の熱い追求の念が、自己自信の存在の意味に向けられ、ここに自らの答を出すことが学生には出来なかった。だから学生は、我が身に起こりくる現象が、総て不安や蟠り（わだかまり）となり、苛立ちや焦りと成つていった。しかし本来ならこれは、春を待つ青春の息吹であり、やがて花開く理想のためのエネルギーであった。それが大学側との些細な諍いが火種となり、争いが起こり、東大紛争の抜き差しならない混乱に、学生は呑みこまれていった。その時には、もう一人の力では自分を建て直す事は出来なかった。巨大な闘争の波は、学生の分別を打ち砕き、余波が日本国中の大学に押し寄せていった。こうして「青春の息吹」が、こともあろうに闘争のエネルギーと成ってしまったのである。そのために学生達は、角棒を持たざるを得ない窮地へと、追い込まれていったのである。

チンピラは、斯くの如き思索を以って、あの東大の紛争を見直して見たいと、思っているところだ。

しかしチンピラは、チンピラ風情の見解ではなく、

「あの紛争の当事者である東大が、学生の闘争の心情や真実を探り、研究する機関を設立すべきだ。」

と、切望している。

なぜならこの闘争は、学問の中枢で起った大事件であり、この事件の当事者が、当事者自身の経験を研究できる、得難い事例だったからだ

この紛争の意味を、体験者自身が研究し、明らかにするということは、自分の心の疑念を、自分で解明出来る人間研究であり、研究の成果が最も期待できる、生きている学問となるからである。

ところがこの事実には、東大は未だ思い至っていない。

何故なのでしょう。

チンピラは、この事実は無為だと思っている

何故なら、人間に出来るのは、総ていい加減で、不本意で、不完全だからだ。

この証拠が原子力だ。核融合によって出される放射能汚染が、現代の化学では無害化できない。だから原子力発電は中止だ。

その通りだ。問答無用の正論である。

しかし、この正論通りの悪は、放射能汚染

だけではない。一千兆円を超える国債や、金が金を作る金融弊害は、人間の格差差別を助長し、世界の人々の足枷と成り、平等や労働の悦びを奪う大問題だ。そして化石燃料だ。これは人間の欲望が作り出す、自然破壊の凶器であり、地球上はもはや、人間が住める環境では無くなってしまった。これら総ての悪の極みは、「人の心」であり、この心の成せる悪に勝る悪は地球上にはない。放射能汚染も、この心の悪には適わない、つまり究極の悪の親玉が、「こころ」なので有る。ならばこの際、これら総ての悪の親玉である働きを、即刻中止にすべきだ、と、チンピラは思うのである。

今こそ一気に、総ての悪は中止にしましよう。

そうすれば人間界は、平和で住みやすい、善人ばかりの素晴らしいパラダイスが実現します。

如何でしょうか。

「・・・・・・？」

でも、そんなことが出来るのでしょうか。

出来る訳が有りません。

これが机上の学問の、弊害です。

なぜなら、悪いからと解っていても、悪を止める事は、人間には出来ないのが、現実なのです。

なぜなら、この悪が、人間の生きている現実の事実なのです、ですからこの悪の事実を解明研究する機関が、学問で無ければなりません。しかしこの学問の研究をする学者が、人間を総合的に捉え、これを研究する事が出来ない仕組みに成っているのが、いまの大学機構の実状なのです。ですから研究成果は総てバラバラであり、一人の人間の全体を研究するのではなく、各自が勝手に部位を切り取り、これをこねくり回して研究しているのが、いまの学問の現状なのです。ですから総ての研究成果が、生きている人々の役に立たない、無意味な研究に終わっているのです。なぜなら生きている人々の心の痛みや苦しみに、応えるための研究ではないのです。この不甲斐ない学問の現実が、現代の究極の悪であり、チンピラは切開手術が必要だと思っっている処だ。

以上これがチンピラの、東大への提言であり、ここにチンピラの正体があります。

人生には常に答えが有り、その答えを行えば、何時も正しい生き方ができるものは有りません。

だから、人々の人生はこの答えを求め続けて、生きて行かなければ成りません。

先人は、私達人間のために、「人間が、人間らしく生きる」叡智を書き残してくれました。しかし、この教えを学ぶ学問の場が、東大闘争のこの頃から急激に崩れ始め、学生に道を教える心の教育は、学問の場から姿を消し、精神は、日本人の心から無く成ってしまいました。

もしかしたら、この道を無くし、心の置きどころを無くしてしまった日本の実状が、近隣国から危険な外交を迫られ、国内では凶悪な殺傷事件が繰り返される、危機的原因となっているのでは無いだろうか。そのために、この不幸な一隅で、明日は一文無しになってしまいかも知れない、社会の仕組みに怯えながら、必死に生きている日本国民の姿が、東大の先生には見えないのでしょうか。この嘆きや悲しみに応える研究機関は、なぜ東大に出来ないのでしょうか。

この問題に応えるためには、あの東大紛争の爆発的エネルギーの解明研究が、尤も有効な研究対象であり。今こそ東大は、この一步を踏み出さなければなりません。この研究機関が東大に出来れば、人々の痛みや悲しみに応える、心の道導(みちしるべ)が日本に戻って来ます。そうなれば、生きている人々の「こころ」の抛り所が出来るのです。机上の研究はもうウンザリです。血の通った人間研究こそが、人間の学問でなければ成りません。この研究姿勢が、やがて学問の礎となるのです。

ところが、東大の実情は、シガラミや、孤立が進み。身動き執れない、人間関係の複雑な、組織同士の優位の争いに陥っています。この事実に対して、勇猛果敢に「大暴れする」看護連盟会長のような学者がいません。

あれだけの大紛争に明け暮れ、学生が角棒を持って戦った東大なのに、いまだにあの事実解明も、答えも有りません。

こんな不甲斐ない大学が、日本の東大であつていいのでしょうか。

学問とは何なのでしょう。

チンピラは学問とは、「アレ? これって何だろう。」

この素朴な疑問が、学問の一步であり。

「おかしい・なんだろう・どうして、どうなっているのだろう。」

これが学問の始めだ、とチンピラは理解している。

もしそうなら。

もしチンピラのこの思いが、その通りなら。

あの東大紛争の解明研究の、研究機関が東大にないのは、日本国存亡に関わる、重大事件であり、即刻、舵を取り直すべき緊急事態だ。なぜなら、非常識が常識として通用する、日本に成ってしまったからだ。

この実状は尋常ではありません。

あれだけの学生が角棒を振り回し、乱れ暴れ狂った事実は、学生自身が体験した事実です。この体験者本人である学生が、あの闘争を振り返り、自分自身に対して、研究解明の答えを求めない学生ならば、東大の学問とは何なのでしょう。これが事実なら、東大はもはや魑魅魍魎の、奇怪な非人間的

研究者の巣窟であり、この巣窟の実態解明こそが、学問のメスが向けられるべき処であり、これこそが東大が自ら説明すべき、本来の研究課題でなければならぬ。と、チンピラは叫びたい。

しかし、自分の体験に目を向け、暴れ狂った自分自身にメスを揮い、自分を研究しようとする学生は居ません。ならば教授は何をしていたのでしょうか。あれほどの醜態をさらけ出した大学を目の前にした教授達は、いったい何をしていたのでしょうか。

チンピラには、この情報が届きません。

もはや東大は、魑魅魍魎のはびこる地球外生命体の巣窟であり、ここには人間の常識が通用する、人間研究の場は有りません。

何故なら、この東大には、

「客観的研究の場は有っても、主観的研究の場が無いのです。」

だから、学生や教授が体験した事実を、研究する学問が、ここには有りません。

自分には関係のない。客観的对象を研究する処が東大であり、過去の現象を捕え、これを弄んでいる研究が、東大の研究なのです。だから生きた人間の生身の事実に応える、主観(こころ)の研究は東大には有りません。

だから研究対象を机上に並べ、是をこねくり回して論文を書く学問が、学問に成り、生きている人間の経験の事実を説明する学

問は、東大には有りません。何故なら客観的観察データが学問であり、生きている人の心(主観)の研究は、学問としては成立しないのです。なぜなら、主観を客観的に捉える事は、人間には出来ない難題だったからです。だから学問研究の形態から主観(こころ)は外されてしまいました。

ならば、主観は研究しなくてもいいのでしょうか。

良い訳が有りません。

しかし対象が主観では、研究が成り立ちません。だから、論文が書けません。論文が出来なければ学問ではありません。だから研究者は居ません。無論研究機関も有りません。主観は、どんなに重要な研究課題であったとしても、学問には成りません。だから学問の世界から投げ出され、見捨てられてしまったのです。

そのために人間は、日々の生活にとって一番重大な問題解決が、総て手つかずのまま、学問の場から消えてしまいました。

ですから教育の現場に立たされている、学校の先生達は、事件や事故が起こる度に、

「命の尊さを子供たちに、徹底して教えたいと思います。」

「自殺といじめとの因果関係を調べ、徹底的に対処したいと思います」

と、教育委員会や校長先生は、虚しいコメントを繰り返しています。

人間の経験は、「物事を知ることと、物事が出来ることとは、」別問題です。

これは日本の常識でした。それなのにいつの間にか、この区別がされないままに、使われるように成ってしまいました。

だから先生達は

「人の命は大切にするものですよ」

「仲間いじめをしてはいけませんよ。」

と教えれば、子供達はいじめをしない人間になれる、として指導しているのです。

本当でしょうか。

本当に先生達はそんな事を、思っているのでしょうか。

思っている訳がありません。

なぜなら、いじめは繰り返され、命はいよいよ粗末に扱われています。

ならば、どうすれば良いのでしょうか。

どうする事もできません。

なぜなら、「言葉通りの、正しい行動ができる子供にするには、どのような教育をすれば良いのか、」先生には、まったく解らないからです。

この問いに、答える智恵が、現代人には有りません。

だから東大に、この学問の礎となる研究機

関を、作らなければ成りません。

しかしこの研究は、主観に関わる問題です。だから人の心の解明無くしては、研究は成りません。だから研究機関が東大には有りません。そのために手付かずのまま敬遠して、今日に至ってしまいました。

この現実には、断固、打破しなければ成りません。

打破しなければ、日本国は、心の足掻きに翻弄され、抜き差しならない窮地に堕ち入ってしまいます。

この予感には、もはや良識ある日本人の常識です。

早急に、人間の主観（こころ）の研究機関を、東大に作らなければなりません。これがチンピラの切なる願いです。

これだけでは有りません。日本国は、人間をより確かに知るための常識が、現代社会から無くなり、無意味な言葉に翻弄され、不幸を煽り、人々は意味のない造語に、混乱しています。

しかし、ここから抜け出す術（すべ）を人々は知りません。

それなのに、この術を教えるための研究機関が、東大には有りません。

これが私達の現状です。

なぜなら今の世の中には、自分の「こころ」を、深く自己洞察をすることが出来る、先生がいないのです。だから、子供の心を聞き取るうとしても、先生には子供の心を思い計る術(すべ)が有りません。そのために子供達が悩みを訴えても、総てが曖昧なまま、解決されずに終わってしまうのです。

以上これまでが悲しいかな、日本国の実状です。

いったい、学問の場とは、どうなっているのでしょうか。

十三 文人画家

チンピラをモルモットにしてどんな論文成果が有ったのだろうか。

チンピラは文人画家を自称し、襖に山水画を書く仕事をしてきました。

ある時陶芸家の工房で、名古屋大学の大学院の助教授に会いました。

そこで「研究対象に成つて欲しい」と頼まれ、そこからチンピラのモルモットが始まりました。

三重や京都の寺で、襖の揮毫をする度に同行して、助教授はチンピラを観察し、質問やインタビューをしました。

しかし失敗が許されない揮毫場面でのインタビューは、チンピラには強烈なプレッシャーでした。でもチンピラは受けて立ち、質問に答えました。しかしその揮毫の現場で、大変な事が起つてしまいました。

京都の寺の襖8面に、十六羅漢を書いて

いた時、チンピラは「しまった」と思いました。羅漢の顔が、羅漢では無く人間の顔に成つてしまいました。これに気付いたチンピラは暫し苦悶し、筆を止めました。この一部始終を助教授は見ていました。失敗が許されないチンピラの画法なのに、大失敗してしまったのです。チンピラは苦悶して、唸っていました。この間、助教授は興味津々で、筆の行く末を見守っていました。チンピラの書く画法は、失敗は絶対に許されません。この時は物理的にも、襖一枚の価格が20万円もする高価な大襖であり、これが八枚あり、裏には既に山水画が書き上がっていました。もし失敗すれば襖代だけでも160万円の損害です。チンピラは絶体絶命のピンチでした。しかしチンピラは暫く苦悶した後、筆を加えました。人間の顔が瞬く間に岩に成つてしまいました。しかし線を書き直す事は絶対に出来ません。だからチンピラは人間の顔に線を書き加えて岩にしました。チンピラは「岩で助かった」と思いました。もともと羅漢とは、「岩から沁みだした様に現れた」と、「禅月大師の生涯と芸術」の本には書かれています。これは跡見学園の教授から「羅漢を書くなら、禅月大師の羅漢でなければならぬ」と言われ、お借りした本です。ところが漢文ばかりでとても難解でした。でもチンピラはとりあえず、岩から沁みだした様な羅漢を書こうとして、襖に挑みました。だからその通りの羅漢が書き上がりました。

しかし助教授には、岩に書き上がった後も、人間の顔がはつきり見えていました。だから「岩に成つて居ない」と、言っていました。数年後にこれを見る機会がありましたが、「顔がまだはつきり見える」と助教授

は言っていました。

チンピラはこの助教授を見ていて、研究とは、この助教授自身の「どうしても顔に見えてしまう」、「この経験は、説明することが研究であり、この経験は、助教授本人が最も解明したいと思う、人間の心(主観)の現象です。この「知りたい」と、思う思いが有る研究こそが、研究対象でなければ成りません。この助教授の「どうしても顔にみえてしまう」この体験を、モルモットにして論文を書くことが、これが本来の研究論文であり、研究成果が期待できるチャンスだった。とチンピラは思いました。

でもこれが、今現在の研究者の実状です。

何故なら、自分の主観を、自分自身が客観的に捉え、これを研究対象にする研究は、人間には出来ないのです。

つまり、自分が自分の主観を研究するには、自分を客観的に捉える必要があります。しかし自分とは常に刻々と変化し、捉えようとしても捉えようがありません。だから自分の主観を自分で客観的に見ると言うことは、自分には出来ない事だったので。なぜなら、自分とは常に主観に生きているものであり、この主観を観察する事が出来ないのが、生きている自分の証拠だったので。だから主観は難解な研究対象で有り、学問にとっては研究対象には成らない、厄介なものだったのです。だからこの(主観)は、学問から敬遠され、見捨てられて今日に至ってしまいました。ところが私達の現実の問題は、総てこの人間の心(主観)に因って、作り出されているのが現実です。だからこ

の心(主観)の解明こそが、問題解決の根源であり、ここに総ての原因が有ります。それなのに、この心の研究の方法を、大学で学んだ教授が、今の東大にはいないのです。

これが東大の実状です。

これでは人間の問題解決はできません。

十四 司法

だから今の人々は、この解決を司法に求める様になってしまいました。

心の改善をしない解決方法では、本当の解決には成りません。人間の心は司法の判決により、いよいよ不満や不信が募り、更なる事件へとエスカレートしています。だから本来なら善良な人々が、突然事件の当事者に成ってしまうような、恐ろしい現実が出来上がってしまいました。

なぜなら、心の改善が成されていないからです。

だから問題は、いよいよ混乱し、奇妙な犯罪や殺人事件が繰り返される、日本に成ってしまいました。

この様にして、重大事件を起こしてしまった人々の暴走は、もはや尋常な手だてでは治まるものでは有りません。

これが私達の、日本の実状です。

これでもまだ東大には、この実状を解明研究する必要はないのでしょうか。

ここに答えを出す学問は、日本の大学には有りません。

代りに「震災の対策だ。放射能の対策だ。」と言う声ばかりが叫ばれています。

しかしこの被害対策は、人間の心から生れる、悲しみや苦しみに応えるための、対策では有りません。

だから犯罪者は、立ち直る術もなく、苦しみがくばかりで、いよいよ複雑な犯罪事件を作り出ているのです。

なぜなら、人間の心を解明する研究機関が、東大には無いからです。いや東大だけでは有りません。現代社会の人々の常識からも心は消え去り、学問から見捨てられてしまいました。

なぜなのでしょう。なぜ東大は、解決すべき人間の「こころ」の問題を、手つかずのまま、放置しているのでしょうか。

心の研究を無視してしまった研究者達は、いま何を研究しているのでしょうか。

人々はおはや、崩壊寸前の危険な人間社会に、生きています。

このような私達は、震災や放射能対策の報道に惑わされ、自分の心の痛みや傷までが、この震災や放射能の問題解決に因って、解消出来るかのような思いで、「原発反対・震災復興」を、訴えています。確かに震災や

原発も対策が急務です。だから政府は過って体験した事の無い、大がかりな対策に挑んでいると言っています。ところがこの対策は、私達人間の心の問題とは、別問題です。この事実を人々は確りと認識しなければなりません。なぜなら、東大紛争の二の舞が起こり兼ねない、日本国の実状が見え隠れしているからです。

この危険な実状をなぜ学者は、人々に明らかにしないのでしょうか。

それは、研究機関がないからです。

心の痛みや傷には、川の護岸を直しても何にもなりません。

こんな当然の道理が、今の東大の先生には、分からないのです。

ならばどうすれば良いのでしょうか。

本来ならここに孔子や、仏教の教えが解かれ、人々の生きる為の、生き方が示されるべき所ですが、なぜかこの研究も、机上で弄んでいるだけで、現実の人々の役には立っていません。

ただ持て余しているだけです。

人々が生きている日々の生活の中で、道や法を研究し実践している、学者や修行者が居ないのです。

もうどうする事も出来ません。

だから心の痛みや悩みの解消は、当事者が解決するのでは無く、これを警察が受け止め、解決は司法に任せているのです。これ程に不自然な現実が、日本の実状なのです。それなのに人々は、これで解決できたと思っ

ているのです。

だから重傷なのです。

ですから社会のトラブルや混乱は増えるばかりで、想像もできない恐ろしい犯罪が、日増しに繰り返され、マスコミに煽られています。

これを司法が裁き、罪や罰を与えること

によって、何が解決できるのでしょうか。

本人の心の改心が無い解決は、心の問題解決には成りません。

この改心の為の、心の研究学問が、現代社会には有りません。

これは恐ろしい、日本国の大問題です。

死刑執行当日の死刑囚の様子は、昔は、ほとんどの人が、覚悟して死に臨んだ、と聞きました。しかし今の死刑囚は、喚き叫び、もがき苦しみ暴れ廻る残酷な最後は、「とても尋常では見て居られない、」と言うテレビ放送を、チンピラは見た事がありました。でもこのテレビ放送の中で、感謝の言葉を述べ「ありがとうございました」と叫んで、死に挑んだ人もいた、と言っていました。

今の人々は、自分の心の整理の仕方が、解らない人間に成ってしまいました。

それなのに、この事に対して、何処からも声が上がりません。

と言うことは、日本国には心の問題は無いのです

エッ・・・本当ですか。

とんでもない、無い訳がありません。

だから、もう絶望です。

もう司法で何とかなる問題では有りません。

これは国家の一大事です。

しかしだからと言って、憲法問題では有りません。

しかし司法の元は憲法です。

憲法で、人の心の痛みや傷は、直してけると、書いて有るのでしょうか。

有りません。

この憲法解釈について国論が二分し、混乱が繰り返されています。

何故なら、物事の解釈は、人の数だけその答えは有るのです。一つの答えに人間が揃って同意する事など絶対に有りません。これが人間の真実です。

でも司法の元の、善悪の元となる憲法は、国民の同意を得て、成り立つものでなければなりません。

しかし「憲法の全文を、貴方は読んだことが有りますか。」

チンピラは読みました。しかし日頃の関心が薄く、理解力が足りませんでした。

こればかりでは有りません。

憲法改憲が必要だと言う説明を、本当に理解している人はいるのでしょうか。

憲法改憲反対だと言う意見を、本当に理解している人は、いるのでしょうか。

このパーセントは、どんな数値が出るのでしょうか。

物事の判断は、常にその事をより深くより正しく理解してから、判断しなければ、結果は無茶苦茶になるのは道理です。

ならば憲法改憲は永久に出来ません。

でも尖閣諸島の領有権問題は日中でもめで居ます。

盧溝橋事件のように、どちらかが先に弾丸を発砲すれば、たちまち日中戦争の二の舞になる事は、もう誰の目にも明らかです。

ならば、どうすれば良いのでしょうか。

「もう戦争はいやだ」では治まる話して

は無い、緊迫した実状です。

貴方なら、どうしますか。

戦争は絶対に避けたい、これは日本国民の総意です。

しかし相手国があります。

この相手国の思惑と、我が国との思惑とに歪が生まれ、これが弾けようとしているのです。

しかしこの状態は何時まで続くのでしょうか。歪は修復せずに何時まで持つのでしょうか。いま日本国は、生死を懸けた重大な局面に立ち至っています。

貴方なら、ここに答えを出す事ができますか。

チンピラには、もう、ここに応える答えが有りません。

いや、チンピラばかりでは有りません。これが日本国民の実状です。

しかし政府は如何なる時でも、常に敏速な答えを出し、速やかに対処しなければなりません。

国民は迷っていても、国家を預かる政府は、常に明快な答えを出し、行動しなければなりません。これが政府です。

でも国民は、この政府の緊迫した現実を

見落しているのでは無いでしょうか。

政府は必死に答えを出し、常に世界の事ごとに対して、敏速に対応しなければなりません。

これは日本国民が選んだ、政府の仕事です。

ならば日本国民は、政府が速やかに行動できるように、対処しなければ成りません。

しかし、現実には「この逆」です。

「内の父ちゃんが、とんでもない事ばかりするから、家の中はゴチャゴチャよ？」

「内の母ちゃんが、やりたい放題の浪費で、もう俺の処は崩壊寸前よ？」

と、嘆く奥様や旦那様の実状が、そのまま今の日本国民の、実状では無いでしょうか。

人の生きている現実には、常に失敗の許されない「一歩」です。

この厳しい現実が、チンピラの墨の一筆であり、生きている人々の一瞬の「一歩」です。

この真実の一歩を、私達は絶対に、踏み違えてはなりません。

十五 短歌

アレ凄いい 梅の蕾が 昨日より 雪に抱かれ、赤く恥じらう

寒中に 忍び辛苦を、越えて咲く 雪中に 早や 春は芳し

ワア凄いい ワアまた凄いい ぼた雪だ ションベンしても し終ってもワア

俺だけは 絶対違う アイツより 百千倍も 億万倍も

雪落ちて オオ万両の 赤映える 静寂に見る 白銀の音

もうそんな、人間の勝手、通らない 自然の脅威、目の前にして

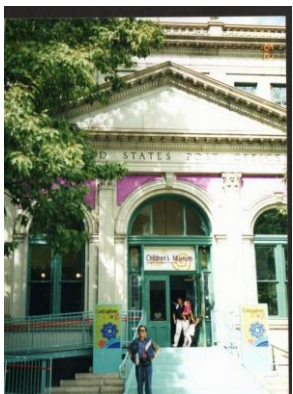
寒に絶え、辛苦の波に 曝されて 雪中に 咲く 香り愛しい

雪が降る ただ雪が降る 雪が降る 香り密かに 庭に雪降る

もうそこに 春すでに知る 雪の下 人の期待も 波風も経て

十六 ピッツバーク

名古屋大学院の助教授は、東大大学院に移る前に、チンピラを、アメリカのピッツバークへ連れて行ってくれました。



ピッツバーク児童博物館の筆者

ピッツバーク児童博物館では、芸術大学

の教授が、様々な身の回りの物を使って音色を奏で、チンピラの揮毫に参加してくれました。この教授は後に日本にも来て、相模原や名古屋でも襖絵揮毫とコラボレーションをしました。この時はドイツの現代舞踊の踊り手や、尺八を吹くアメリカ人、そして声の発声を芸術とする音声家も加わり、究極の奇妙なコラボレーションをしました。しかしチンピラはそんな中でも、ただ黙々と独り揮毫に挑んでいました。しかしこれは二度と出来ない、現代美術の範疇だ、とチンピラは思いました。

奇妙といえば、ピッツバーク児童博物館には、アンディーウオフォールの作品が至る処に展示してありました。チンピラの作品も常設展示の約束で揮毫しましたが、作品が大き過ぎて展示場所に心配していました。しかし何とかトイレ近くでしたが、立派に展示されました。

でも現代美術の大御所、アンディーウオフォールの、マリリン・モンローの写真に、絵の具を塗り重ねた様な作品と、東洋の伝統絵画が並んで展示されたのは、チンピラには面映ゆい思いでした。

名古屋大学でもこれと似た様な思いをしました。宇宙飛行士毛利衛さんが、検査実験をした実験室があり、チンピラもそこに入られ電極を体中に付けられ、地球儀の様な中で検査実験をしました。この時も面映ゆい思いでした。

鉄の街ピッツバークには、鉄工業でアメリカNo.1の財を成した、カーネギーのお屋敷が丘の上にあります。遠くからは小さく見えていたのですが、中に入ると、さすが

立派なお屋敷でした。そこには、奴隷だった使用人の部屋もありましたが、チンピラの住む日本の部屋より立派でした。この街には、昔のままの溶鉱炉や、鉄を加工した工場がそのまま残されていて、寂れて赤茶けた風景が、なぜかチンピラには悲しく見えました。

これと対照的だったのが、ピッツバーク美術館だ。館内に入ると子供の様なロボットが近づいてきて、案内してくれた。チンピラも話し掛けて見たが、下手な英語では通用しなかった。

この街の中心地、ダウントウンには物騒で夜は行けない、と、助教授が説明してくれた。宿舎は長期滞在の出来る、過って助教授が下宿していた、一軒家を借りてくれた。この家主は海外旅行中だった。この住宅の近くには、イスラエルの人達が住む住宅地があり、すれ違う人達が、頭の上に小さな飾りの様な帽子をしていた。

ある時、チンピラが一人で留守番していると、家主の友人が訪ねて来た。前もって日本人がいる事は知っていたが、いろいろ話しかけられチンピラは戸惑ったが、必死に受け答えした。しかし、生粋のアメリカ人と言葉を交わした事が、チンピラには嬉しかった。まだ若い客であり、映画の中のトニーカーチイスと話している気分だった。

そして、この家の近くに住む、ピッツバーク大学の先生の家でも、小ぶりの屏風に山水画を揮毫した。しかしチンピラはこの屏風を、作ってくれた人に渡し、先生の家には置いてこれなかった。この事が、今でも悔やまれてならない。

この様にして、久し振りに見るアメリカは、15年前とは随分違っていた。

ピッツバーク郊外の、小学校へ出かけた時には、校舎に入った途端、校長先生が跳んできた。

「車は何処に停めた。鍵は二重に掛けたか」という大声だった。

「校内に停め、鍵は二重に掛けました。」と、答えると校長先生は安堵した。

もし、校外に停め、鍵が二重に掛かっていなかったなら、車内の物は総て盗られ、車は無く成っていただろう、と校長先生は言った。

十五年前のアメリカは、ここまでは酷くなかった、とチンピラは思った。しかし校内には、「銃を持つてくるな、ドラックは吸うな」の張り紙は無かった。校内は整然としていて、乱れた様子は何処にも無かった。

「アメリカは教育の重要性に気付いたのだ」とチンピラは思った。

屏風揮毫をしている時も、生徒達は規律正しい態度で見ている。フラフラ歩き回ったり、私語が騒がしいことは無かった。

「この子供達が、大人に成ればアメリカは変わる。」とチンピラは思った。

揮毫以外に、画家のアトリエを何件も尋ねた。チンピラは見た事も無い形式の、奇抜な絵画や作品に目を見張った。何処のアト

リエでも、日本猿チンピラを和やかに迎えてくれた。その待遇は、英語が話せないハンデを感じない程の、フランクなものだった。

これは長期滞在させて頂いた、陶芸家の力だったのか、助教授の人柄だったのか解らないが、とにかく帯在中は、尋常では無い歓待をして頂いた。だから日本にいる時と同じような自由な気分で、チンピラは過ごす事が出来た。ありがたい感謝の思いでいっぱいだった。でもこの思いを上手く伝える事が出来ず、チンピラは今でも悔んでいる。

だから「ありがとうございました。」と、書き加えて置きたい。

山の別荘へは陶芸家のご主人に案内して頂き、頂上に立ち、真っ赤な花に囲まれて見る山波は、まさしく別天地だった。遠くに富士のような山が見え、チンピラはこれこそ理想境だと思った。ところがチンピラは、これでもまだ英語が解らなかった。何故なら、チンピラには助教授の献身的通訳は無論ですが、大学院生とドイツのルフトハンザ航空のスチュワーデスが、通訳として常時付いていてくれた。だから英語を覚える必要もない、極上の待遇をチンピラは受けていました。

十七 切望

このような手厚い配慮をしながら、名古屋大学院助教授は、チンピラをモルモットにして論文を書いた後、東大大学院の准教授になられました。なのに、東大の何がチンピラには、不服なのでしょううか。

それは「こころ」主観の研究が、東大には

ないからです。

チンピラは今こそ、東大が世界に先がけ「こころ」主観の研究機関を作るべきだと、訴えているのです。

でも、その方法が判りません。

ところがチンピラは、主観を見る方法を、こんな言葉で聴いた記憶がありました。

それは、刻々と変化する自分を、常に自分の目で捉え、自分を自分で自覚している事です。これが実行出来れば、主観を捉える事が出来ます。

ならば、どうしたら捉え続けている事が出来るのでしょうか。

それは、自分以外のもう一人の自分が、常に自分を見ている様にすれば良いのです。

そんなことが出来るのですか。

出来ません。

だから出来る様に修練するのです。

これが修行です。

俗念に因って「思い迷う」自分を、もう一人の自分が、この「俗念に迷う自分」を見続けているのです。

この時の、もう一人の自分は、常に「無私」でなければ成りません。

そうすると、やがて自分が自分を見る事が出来ます。そうなれば主観を自分で捉える事が出来るのです。

しかしこれは、自己洞察の呼吸を心得た人の話しです。

修行もせずに誰にでも出来る、単純な事では有りません。

でも、できます。誰にでも修業が出来れば、出来る様になります。

ならば、どんな修行をすれば良いのでしょうか。

その方法と論証を、次にお見せしましょう。

十八 存在は幻想 (アインシュタイン)

相対性理論とは、宇宙創世の実態を証明するための研究理論であり、物質的宇宙世界の普遍的真実を知るための物指しです。ですから心とは関係の無い話です。

ところが私達の心は、この宇宙存在の実態の中にあり、宇宙創世の存在の真実と、深い関わりの中に存在するものだったのです。

つまり心とは、生きている自分と他者との、相互関係から生まれる、実態の無い「こころ」が作り出す幻想であり、人はこの幻想と関わり、ここに自分の行動を起こし、ここで体験した事実を、生きる糧として経験を重ねています。この心は時として実態の無

い真実を作り出し、それを事実と認識することがあります。するとここに正意識と自意識との諍いが生まれ、問題や混乱を呼び起こし、自ら闇に堕ちていく事もあります。だから心は生きている実態の中に、常に全宇宙との関わりを持って、経験を重ねています。この経験によつて、心は物事の意味を判別し、成否を見分ける事が出来る様になります。心は心の望むものと、望まないものを、常に判別して、心の望む未来へ、自分を常に進めようとしています。これが「このころ」の成せる現象です。

ところが現代化学はこの心を、研究対象から外し、学問の対象にはしていないのです。

つまり、これが客観的観測の、机上の遊びで有り、人間に直結する学問では有りません。

だから、宇宙はビックバンにより始まり、膨張し続けている存在であり、ビックバンが起こる前には何も無かった、と言うのが、近日までの宇宙科学者の説明でした。しかし、何も無い処から突然ビックバンが起こる話は、チンピラにも可笑しいと解る話です。つまり科学は「結果だけが有り、原因が無い理論では、科学では有りません。」これは科学者の常識です。でもこのビックバンの現象は、何も無い処から突然爆発が起こった。と言う非常識が、この時点までは、科学者には非常識ではなかったのです。

その所為か、昨日のテレビ番組で、東大の先生が

「いや、ほんの僅かな、小さな物が、実はありました。それが突然大爆発して、ビックバンになったのです。」と説明していた。

チンピラは、開いた口が塞がらなかった。

この時の東大の先生には、自分の言っている意味の馬鹿さ加減が、自分には解っていない、お粗末だった。

なぜなら、一般人の常識を弄ぶ論法に、すり替えられていたのだ。

この可笑しな話のつじつまを合わせるために、東大の先生はさらに話し続けた。

「宇宙にはビックバンが幾つもあり、いっぱい有ります。・・・これはアインシュタインの相対性理論で、証明できます。」

と説明したのです。

もう、無茶苦茶でした。

チンピラはこれが机上の研究者だ、と思った。

そこで仕方無く、不肖私が、チンピラの相対性理論を説く事にしました。

相対性理論とは、この世の一切の存在は相対性理論に適う、存在である。とされているものです。

1、色即是空・空即是色（存在は即ち

空であり、空は即ち存在である。）

これが存在の真実です。

2、無 \parallel 有 有 \parallel 無（無と有は同じであり、有と無も同じである。）

これが存在の事実です。

3、無限小 \parallel 無限大（無限小を行けば、やがて無限大に至る）

これが存在の妙であり、ブラックホール
の入口であり、ビックバーの出口です。

4、無一物は無尽蔵（無一物は、無尽蔵である。）

これがビックバーンです。

以上これが、東大の先生の知らない、東洋の宇宙観の常識です。

ところがこんな常識もない、不甲斐ない事実が、東大の先生の実状なのです。

心の解明研究の必要性を感じないのが東大であり、東大にはだから心の研究機関が、有りません。

チンピラには、相対性理論を数式に替える力は有りません。でも相対性理論には強い関心があります。

前に書いた、「色即是空」は、存在している、目の前の一切が、そのまま「無」だと言う意味です。

つまり、人間はまだ「無」の存在を見た事が有りません。頭の中で勝手に想像してい

るだけで、まだ「無」の存在の事実を、人間は確認した事がありません。

だから、目の前の存在を指して、これが「無」だ、と言われても、意味が分かりません。ところが、この目の前の存在の事実が、そのまま「無」なのです。

人間はまだ誰も、「無」を見たことが有りません。でも「有」は知っています。

でも、その「有」が、実は「無」の実態だったのです。

ですから、「有」そのものは、「無」以外の何物でも有りません。

だから、比べる対象の区別がないものは、常に一つだけの存在です。言葉で「無と有」に区別しても、一つの物は一つです。だから、「有と無」とは目の前の存在を指している言葉であり、この目の前の存在は、有の実態であり、無の実態でも有ります。

なぜなら、人間は、自己の観念に固執して生きています。

「無」は、この人間の観念の中に有るものであり、まだ誰も「無」の実態を見たことが有りません。だから目の前の存在を、これが「無」です、と言われても直ぐには意味が解りません。でもこの「有 \parallel 無」であることを、やがて理解する事になります。なぜならこの世には「有」しかないからです。だから「有」しか無い存在が、ただ一つの存在であり、この「有」の存在の事実が、実は「無」

だったと知るためには「叡智」が必要です。するとこの「有」が、そのまま「無」で有る事が分かります。これが宇宙存在の妙であり、ビックバーンです。だから「有」と言う存在が、実は「無」の実態であり。これが宇宙存在の真実です、と理解する事ができるのです。つまり存在は「有 \parallel 無」でなければなりません。

だから、無 \parallel 有 であり、有 \parallel 無 なのです。

言葉をかえれば、色即是空 であり 空即是色 です。

ならば、無限小は無限大に至る、という意味はなんなのでしょう。

それは、無限小を、何処までも突き詰めると、その先には無限大がある、と言うことです。現代の物理学はブラックホールに吸い込まれる事までを、考えていますが、吸い込まれた後の出口を考えれば、この意味が理解できます。これがビックバーンです。つまり無限大を突き進んでいくと、やがて無限小に至り着くと言うことです。

だから無限小と無限大は、同じ一つの物だったのです。

この思いに至り着いた、東洋の思想家達は「無一物無尽蔵」と言う叡智に至り着きました。これがビックバーンです。

私達の生命も、わずか100年前には、何処に存在していたのか、誰にも解りません。

何処から生まれ、また何処かへ去っていきます。

これは、無限大は無限小に返り、無限小は無限大に返る、と言う、科学者の知らない宇宙存在のリサイクルが、この世には有る証拠です。

チンピラの友達である、看護連盟の会長は、死ぬ前に葉書で「もう宇宙の分子に戻ります」と書いて送ってくれました。しかしチンピラは、肉体は分子に戻っても、生命は分子には返らないと思っています。生命には生と死の繰り返しがあり、肉体は分子に戻っても、生命は再度、何処かに生まれ出る世界が、待ち受けています。でも今はまだ、証明は出来ません。ただそんな気がするだけです。

でもこれは、人生の総てを懸けて思い至った、チンピラの考えであり。東大の先生の机上の遊びでは有りません。

だから、チンピラのこの思考のプロセスが、東大が目指す研究学問でなければならぬ、とチンピラは考えています。

このような経験を通じた研究こそが、チンピラが東大に指摘したい、学問研究の本分です。

心が欲する時の人間の機能は、頭で考えるだけの能力では無い、無限な能力を引き出す可能性が有ります。

だから研究は、「こころ」の指示に促され

る研究でなければ成りません。これがチンピラの指摘したい処です。

そのために、チンピラは今生の思いの限りを、書き連ねてきました。

これがチンピラの叫びです。

でも、ここまで書いて来て、いま亦気が付いた重大な一大事がありました。

それは、人間の観念の中には、生死が有り、過去や未来が有ります。

だから人間は、この経験によって得た記憶は、間違い無く有った事実だと、思い込んでいます。この記憶を元に、人間は物事的一切を考え、答えを出してきました。

しかし、そんなものは、観念の中の事実だけであり、実在する事実は何処にも有りません。

確かに私達の記憶には、過去が有り未来も有ります。しかし、見直して確認して下さい。

有るのは、今がある事実だけです。

確かに記憶に残る過去を、私達は生きて来ました。生きていたからこそ今日が有り、今に至り着いたのです。

その通りです。

でも、もう何処にも過去は有りません。私

達の経験の積み重ねは、確かにありました。写真や映像にも残っています。

その通りです。でも写真や映像には残っていませんが、その過去の事実は、もうまったく「かけら」も有りません。

つまり、もう無いのです。もう何処にも過去の存在はなく、有るのは、この一瞬の今が有るだけです。未来もまだ有りません。

つまり、もう過去の事実は、何処にも、その存在はないのです。有るのは、過去が有った事を裏づける、証拠ばかりです。

でも証拠は有っても、存在は有りません。

つまり、有るのは「今」だけで有り、「今」以外の何物も存在しません。

太陽も宇宙も、総て今しか、存在は存在しません。

生死も例外ではありません。生も死も今この一瞬だけが生きている、実在であり、もうそれ以外の存在は有りません。

つまり、過去から繋がっている今が有ると言う記憶は、記憶だけが有るものであり、その存在の事実は、今の存在以外には何処にも有りません。

だから、有るのは今だけです。今の一瞬こそが存在する事実であり、他の一切の存在は、もう何処にも有りません。

つまり、私が生きている限り、この世の存

在は存在し続けますが、死んでしまへば、一切の存在が、この世から無く成り、宇宙も未来も存在の事実は、総て消滅してしまいます。

つまり、私達は自分の生命が死んでも、ただ物質は残っていると思つて居ます。だから看護連盟の会長も、分子に返ると言われました。



アトリエに咲いた蓮

自分が死んでも、まだ存在は存在していると、思っているのです。

でも、違っていました。

死は、存在の総てを、死と共に消滅してしまい、その後には何の痕跡も残らない、これがこの世の存在だったのです。

だから、誰一人あの世からは、返つて来ません。

宇宙存在の総ては、生命と直結して、存在しているものであり。生命が無くなれば、宇宙も時間も、空間も一瞬にして消滅してしまふ、存在だったのです。

面白いですね。

10年前、百年前、いや千年も万年も前の

過去は、その痕跡があるだけで、もう何処にも過去の実態は有りません。つまり、そんな存在は無かったのです。

137億年前には何が有ったか、等と科学者は言っていますが、今一瞬の過去は、もう何処にも無いのです。

だから、生命の死と共に宇宙は一瞬に消滅し、生命誕生と同時に、宇宙が再び一瞬にして存在する、と言うリサイクルがこの世にはあり、この事実の実態が「無」であり、これが「有」だったのです。

もう、二度と戻らない今が有るだけの存在が、実は宇宙存在の実態だったのです。

一瞬にして、全宇宙の一切が消滅し、一瞬のうちに再び全宇宙が出来上がっているのが、宇宙の真実の実態です。

この存在の事実の不思議こそが、137億年前のビックバンより、遙かに確かな人間の切実な事実であり、この存在解明こそが、人々の待望する、「無」の証明であり、人間に与えられた未知なる意思の働き、神の姿が何処かに見え隠れしているのではないのでしょうか。

これが、地位も名誉も金も無い、チンピラの戯言です。

だから、相対性理論では、これを説くことは出来ません。

如何でしょうか。

以上、斯くの如き研究機関を、東大に作るべきだ、と、チンピラは切望する次第です。

以上これまでが、切ないチンピラの、叫びです。

平成26年5月二十一日

加藤不讓大愚

デカルトの
「我思う故に、我あり。」

ヤスパースの
「なぜ存在の事実があつて、無では無いのか。」

これらの言葉に夢中になった、熱い青春時代が、チンピラにも有りました

アインシュタインは、存在は「幻想である。」と言いました。

チンピラと一緒です。
しかしチンピラは思う。

「今の存在が、存在の一切であり、真実解明の手掛かりはこの一瞬にしか無い。なぜなら、この一瞬の存在が 無 \parallel 有 の実態だからだ。」

と言うおぼろげない思いに、小学校5年の時に思い至り、今日に至りました。

哲学は、科学者に因つて否定された、と聞きました。しかしその哲学は机上の哲学であり。本当の哲学では有りません。

本当の哲学は
「有 \parallel 無」の実態に至り着く叡智でなければ成りません。